

周郷先生の講演をきいて

さかたのぶこ

「周郷先生の講演をきいて」と云うテーマを頂いて二十日ほどになる。母の看病と仕事に明け暮れてつい日を過してしまった。

五月二十四日の研究会の日、母は既に病床にあり、代って父の命日の墓参に護国寺に寄ってから行くと先生は例によって演題とは別の話をしておられる。母親と、子供の自力。自家製のキャベツについても大地は母と同じである……等。孫を持つ身になってますますつのる母へのおもいがふつふつと沸き、涙となって頬を伝った。

それから一か月余、その間に容態も次第に悪く入院、勤務先の厚意で午前は園に午後は母の為に過している。昨夜は病院で痛む腰をさする私に「明日の仕事があるから早くやすむように」と母はいい、今日も昼で帰る私にU君は「もっと先生と遊びたいな」と残念そうに見送って呉れる。八十二歳の母の生涯を考えたり、人のこころ、人と人とのかわりあいを大切に思う日々である。

私が保育界に就職したのはまだ三年前のことである。父と同年であり幼稚園時代からの恩師である倉橋惣三先生のまず「自分の子供を大切に育てること」とのご助言や夫の仕事の多忙さもあった、幼児教育に関心は持ちつつながらそれまで仕事をしたことは一日もなかった。一九七〇年に夫が他界し、三人の子供も家庭をもち、それぞれに孫も恵まれたのを期に、父が私に遺した望みでもあったのでこの道に入った。これからまだ私のにこされていく春秋があるなら、今までの私の人生経験をこやしとして幼な子の仲間となり、彼等のために、とりも直さず私の為に心豊かな日々を過し度いと思っている。

このように経験を語るのは余りにも日が浅いが、周郷先生のお話を伺いながら思い出した四国での事をしたためてみたい。

人生の転機を計るために、私は住み馴れた大都会を離れて四国の小さな幼稚園に就職した。就職というより自分の気持ちを整理す

るためと地方の現状を見学に行くような気持ちで出かけたが、方言のゆたかさ、田植を間近で見ることの出来る喜びはあったが、余りの環境の変化にとまどう事が多かった。戦後間もなくの設立であり、質素堅実で、物資過剰な現在には実に貴重な存在である。

しかし入園式、遠足、誕生会、運動会、クリスマス、雛まつり、卒園式にいたるまで十年一日で、十年前に兄妹を通園させた父兄は「何をしているか見にこないでもわかります」という徹底振りであった。保育内容はご自由という約束をまに受けて出かけていった私が無謀だった。行事すべてが周郷先生がいわれたように大人の側が間に合せにしている良い例で、誕生会は、二か月に一度遊戯室に全員集り、既製の誕生カードを贈り、各クラスから歌や、器楽合奏の披露でおわる。「こんなカードいらん」といって踏み付けた子のわびしいろ姿はどうしようもなかった。何度かの私の提案にも、高齢な設置者の意思は固く一年間同じ形ですづけられた。

行事ばかりでなく夏の風鈴から秋の菊人形のつくり方まで、頑強に伝統がまもられているようであった。

しかし二年目になると私の真意は理解され、カードも手づくりになり、ケーキも出て誕生会は子供達の何よりの楽しみとなった。誕生会はかりでなく、かなりの面をまかされたので、設置者

の気持ちを尊重しながらその土地にあった保育をうみ出していった。これからという時、東京の母がひとりになることになり、保育者である前に人間でありたいと、園や子供達、父兄には申しわけないことながら四国を引揚げた。其後も運動会の頃、卒園式と彼地を訪れ、いまだに親しい交りをつづけている。

三十余年振りに母の膝下に戻り面倒をみながら暫く勉強してみたが、私の師は幼児であると思い再び仕事につくことにした。それがこの青い鳥保育園である。自由な時間のあるうちに幼稚園や保育園を見学したが、こもその中の一つであった。難聴児との統合保育をしているので保母の声も一段と大きく、給食、昼寝と一日の流れの長いことに神経が疲れ、興味はあったが母の世話をしながらではとても無理だと就職は考えてもみなかった。しかし私のどこかに障害児は子供の姿をよりよくみせてくれるということがあった為と思うが、ある時難聴児の父母会に誘われて再び足を向け、その熱のある雰囲気にもまれて即座に引き受けることになった。夫を不治の病で亡くことがなかったら、この父母の心にもなれなかったろうし、この子供たちと苦楽を共にする決心は出来なかったと思う。クラスを担任させてほしいという私の希望で、四歳児を受けもち、二十四人中六人が難聴児である。

保育園というものがはじめての体験であり、その保育に心を碎

くことはもちろんであるが、きこえる、みえるということが人間にとってどういう働きをしているのか、特にその成長期においての役目を考えこんでしまった。そして数十年前母校を訪れた三重苦のヘレンケラー女史の人間的なあたたかみとなにもものにもまけない健気さを、バラック建ての講堂のたたずまいと共にありありと思い出した。あの言葉とは思えなかった彼女の声すらはつきりと――。

難聴児は現在日常の身の廻りの名前、挨拶、月日と曜日、天候、簡単な会話を、併設されている訓練教室で行っている。

「川は水が流れているものだというのに、水道の口から水が流れてくるのをどうして川といわないの？」と三歳の孫が真顔で娘にたずねたということをきき、難聴児がそこまで考えるようになるのは――と悩んだ日もあった。

しかし保育園であるということ、難聴児を含むということを意識しすぎた段階から、この頃、同じ幼児なのだと思えるようになってきた。そして四国るとき、抵抗を感じていた行事が、却っていつしかその大切さの身にしみるようになり、保育案を立てる上の重要な柱になっているのに気づいている。

園では第二土曜日が誕生会で、月番と週番の保育者が当番となる。誕生カードは全職員で考えたペンダント式で、りんごの窓を

あけると写真が出るという可愛いもの。プレゼントは各月思考をこらして、ある時は冠、ある時は壁かけと季節感をもちこみ、当番が腕を競っている。誕生会の近づく頃管理室をのぞいてみると良い。――寸暇を惜しんで熱中している保育の姿があるに違いない。

この前の誕生会のこと、誕生児をひとりずつ花で飾ったみかんの段ボール箱にのせての入場、全園児（約七十名）の前を通る。赤ちゃん組から五歳児迄皆で頭をなで「おめでとう」「おめでとう」の連発。難聴児S君は大柄で恥ずかしがり屋、また新入児で団体にとけこみにくい園児であるが、その晴れがましい王子さま気分、うれしい中にも気まぎれが悪く、細い目がなくなりそうに、そしてもし箱に穴があったら隠れてしまいたいように、全身でその感激をあらわしていた。保育者が熱心であれば園児に通じぬはずはない。人形劇、紙芝居等の保育の出し物に、普通児はもちろん九十デシベル、百デシベルの難聴児も熱心にみとれている。「僕の誕生日はいつ？」「私のは？」と皆指折かぞえて楽しみにしている。この園はまだ去年五月の創立で日も浅く、いろいろ問題をかかえているが、若い保育者がやる気充分なことは未熟さをカバーして余りあると思っている。

保育園の特徴は、母親が働いているので一日の大半をここで生

活し、人間形成のかんりの面が委ねられていて、一日一日の大切さを思う。七夕、十五夜、豆まき等、家庭から忘れられていくものも、新しい感覚をいれながら子供の世界にのこしたい。

中秋の名月のお月見、夜ごとに変わる月の形に興味を持たせ、やがて満月になればすすき、かるかや、おみなえしの秋草。おだんごに柿、栗、さといもなどを供えて月の出を待つ。丸い月面の陰影が向かいあつた兎の餅をつく姿にみえてくる。保育者の真に迫つた餅つきの話に幼な子の夢がひろがり、ベッタン、ベッタンと杵の音がきこえ、つきたての餅の味が口に広がり、唾をのみこむ。そうした時に清らかな、あわいしかし幸なときをもたらし、彼等の自力の足しになるのではないか。科学の発達により月面に宇宙飛行士が着陸した現在、多くのクレーターがあり、うさぎにみえたりする「静かの海」「豊かの海」等がある事が明らかでありそういう絵本をみながら話しあう事も大切であるが、なお、おはなしの世界を楽しませる事の出来る保育者であつてほしい。

一九七三年四月十八日、私は中国北京西南部、周口店到北京原人（シナントロプス）発掘の地を訪れた。郭沫若先生の「山頂洞」と書かれた洞に腰をおろして、少しでも四、五十年前既に火を使っていたといわれる人類の息吹にふれたいと思つて覗きこん

だ私は、石灰だらけになった。やがて埃をはらいつつ立ち上り、洞のある小高い山の上から澄んだ空を仰ぎ、又民家、工場の点にする広々とした大陸をながめた。あれ程嘆いた夫の早逝もこの時点ではものかずではなかった。五十年後に地球があるかしら、とも思つた。

物質文明を追うあまり資源の濫費、伴う自然の汚染。三十年、五十年先すら案じられる。子孫に遺す地球を大切に思うと共に困難な時代に対処出来る人材を育てたい。処理に困るような廃棄物を出さないエネルギー源の開発を望むと共に、人類の平和を築く英知がなくてはならぬ。その人間を育てる事の重要さを日々の保育に思う。いたずらに早教育を追うのではなく、四歳児には四歳児の生活を、喜びを、健やかさを、ゆたかさを存分に味わせたい。自分で観て、自分で聴いて、自分で考える。幼児に人間のふるさとのところを身体一杯に感じさせる行事を——と思う。

母の少しでもやすらかなときの長からんことをねがいつつ筆をおく。
(青い鳥保育園)